パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」 について

— paññā はつねに「智慧」か?——

橋 本 哲 夫

1. はじめに

パーリ語経典韻文中には、paññā を「智慧」と訳すことに疑問を感じる箇所がいくつかある。それらのうち、『スッタ・ニパータ』(Sn.と略記)の「第五章 彼岸に至る道の章」に現れる paññakappin を扱う。

Paññakappin は、学生トーディヤの質問の中と、それに答える仏陀の回答の中で使われる。ここでは仏陀の回答を挙げる――

"nirāsayo so na so āsasāno, / paññāṇavā so na ca <u>paññakappī</u>:/ evam pi todeyya muniṃ vijāna / akiñcanaṃ kāmabhave asattan" ti. (Sn.1091) 〈'/' は改行を表す〉

《参考:中村元訳》彼は願いのない人である。彼は何物も希望していない。彼は智慧のある人であるが,しかし<u>智慧を得ようと計らいをする人</u>ではない。トーディヤよ。聖者はこの様な人であると知れ。彼はなにものも所有せず,欲望の生存に執着していない。

この"na ca paññakappī"の部分は、中村元氏以外の諸氏によって次のように訳されている――荒牧氏「さとりの智慧によって概念構想するというようなことはない」、宮坂氏「智慧を得る〔ことを望む〕者ではない」、渡辺氏「さらに<u>英知を得る</u>必要はない」、村上・及川氏「<u>智慧によっ</u>

パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 43 —

<u>て計らう</u>のではない」,ノーマン氏 "he is not (still) <u>acquiring wisdom</u>"。 これらの訳は,全て,程度の差はあれ,不自然である。これらの訳は, 結局のところ,kappa/kappin については「計らう(人)」,「得る(人) ("acquiring")」の両観念に帰し,paññā については,全て 'wisdom' (「智慧」「英知」)であり,殆ど一義である。

しかし、実際には、各辞書によれば、paññāには、'wisdom'以外に、'knowing or looking after'(「追い求めること」)などの訳語があり、kappaには、1. 'aeon'(劫)etc., 2. 'rule'、'a (proper) way of proceeding'、'a practice'、(「法則」、「やりかた」) 3. 'one of the (Sanskrit) Vedāṅgas, concerned with ritual'、4. 'round mark (to legitimise or identify a robe)'、5. 'one side of an argument'、'an alternative'、'a (false) supposition'、'imaging'、'a theory'、'a figment'(「妄設」)、6. 'proper'、'allowable'(adj.、「相応しい」など)、7. 'having the form of'、'like'、'only a little inferior to'、'almost'、'similar to'、8. (コンパウンドの最後の場合)'almost like or equal to'、などの訳語があり、kappin には、'acquiring'(「得つつある」)の訳語がある。これらを改めて検証すべきであると考える。その際、'knowing or looking after' の邦訳は、「追い求めること」とする。

2. ガーターの要旨と paññakappin

さて、ガーターの一部分の意味は、それを含むガーター全体の要旨から決定すべきであり、ひとつのガーター全体の要旨は、そのガーターを含む一連のガータの要旨から決定されるべきである。このガーターは、「学生トーディヤの質問」という表題でまとめられた Sn.1088~1091までの一連 - 44 - パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫)

のガーターのひとつであり、「学生トーディヤの質問」全体の要旨は、「聖者とは、妄執がなく、もろもろの疑惑を超えており、何者も持たず、欲望の生存に執着していない人であり、それがその人の解脱である」と考える。一言で言えば、「無欲」となる。したがって、このガーターもこの要旨(「無欲」)に沿って解釈されねばならない。さらに、このガータの前半の2行は、〈第1行:X+非X'の否定、第2行:Y+非Y'の否定〉の対句表現であると見ることができる。とすると、要素「Y」は paññāṇavat(智慧を持つ者)であるので、"na ca paññakappin"は、〈非 paññāṇavat の否定〉を意味しているはずである。つまり、paññakappin は、「『智慧の対立物』を持つ(者)」を意味しているはずである。

ここで、paññā の意味を、「智慧」とする場合と、「追い求めること」('knowing or looking after')とする場合に分ける。さらに、pañña-kappin を paññā と kappin(得つつある)からなるコンパウンドであると考える場合と paññā と kappa からなるコンパウンドに -in を付加したと考える場合とに分ける。全体として、(I)paññā の意味を「智慧」とする場合で paññā と kappin からなるコンパウンドであると考える場合、(II)paññā の意味を「智慧」とする場合で paññā と kappa からなるコンパウンドに -in を付加したと考える場合、(III)paññā の意味を「追い求めること」とする場合で paññā と kappin からなるコンパウンドであると考える場合、(IV)paññā の意味を「追い求めること」とする場合で paññā と kappa からなるコンパウンドに -in を付加したと考える場合の4種に分けて、paññakappin が、「『智慧の対立物』を持つ(者)」を意味する場合があるかを検証する。

(I) paññā の意味を「智慧」とする場合で paññā と kappin からなるコンパウンドであると考える場合は、paññakappin は「智慧を得つつあパーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 45 —

る」となり、「『智慧の対立物』を持つ(者)」を意味しない。

(II) paññā の意味を「智慧」とする場合で paññā と kappa からなるコンパウンドに -in を付加したと考える場合,paññakappa が『智慧の対立物』を意味しうるためには,(Y')paññā は(Y)paññāṇa とほぼ同義であるから,「対立」あるいは「反対」を表す働きは,kappa のみが担うことになる。ところが,前述の「1.~8.」の訳語類別のうち,その働きに適している可能性のあるのは,「5.」類の訳語,'a(false)supposition'(〔偽の〕想定,〔誤った〕仮説)と'figment'(作り事)などである。一語で邦訳すると,「妄設」が適すると判断し,kappa の邦訳を「妄設」として論を進める。

paññakappa について paññā を「智慧」とし、kappa を「妄設」として、この 2 語をどのように結びつけると、paññakappa というコンパウンドが、「智慧の対立物」あるいは「智慧の反対物」を意味することができるのだろうか。いくつかの組み合わせを試すと――

- ① paññā「智慧」と kappa「妄設」(を持つ)――この 2 語全体で、「智慧の対立物」あるいは「智慧の反対物」となることは不可能である。
- ② paññā「智慧」によってkappa「妄設」(する)――この「智慧」が「破損した智慧(paññā-parihāna)」「乏しい智慧(appapaññā)」「少ない智慧(paritta-paññā)」などの場合は可能であるが、いまはそうではない。また、「智慧によって妄設するというような(愚かな)ことをしない」と「智慧のある人」の特徴を述べているのであると考えようとしても、「智慧によって妄設する」とはいわば「丸い四角」といっているのと同じで、それを、「持っていない」などという無意味なことを仏陀が言ったとは考えられないし、

^{— 46 —} パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫)

また、経典編集者が、わざわざ書き残しているとは考えられない。

- ③ paññā「智慧」<u>のための</u>kappa「妄設」(を持つ) ――「のための」を「用途」と考えても、「~に導く」と考えても、「広義の目的」と考えても、結局、kappa「妄設」から paññā「智慧」が達成されるということになり意味を成さない。
- ④ paññā「智慧」のごとき kappa「妄設」(を持つ),あるいは kappa「妄設」のごとき paññā「智慧」(を持つ) ――「智慧」=「妄設」となり意を成さない。
- ⑤ paññā「智慧」にして kappa「妄設」――「智慧」が「妄設」となり、仏教を根底から否定しない限りありえない表現である。仏陀の発言であるはずがない。

このように、paññā を「智慧」とし、kappa を「妄設」とする限り、 この2語をどのように結びつけても、paññakappa というコンパウンドが、 「智慧の対立物」あるいは「智慧の反対物」を意味することはできない。

(III) paññā の意味を「追い求めること」とする場合でpaññā と kappin からなるコンパウンドであると考える場合,paññakappin は「追い求めることを得つつある」となる。「智慧」は欲望などを人から除くものであるから,「追い求めること」は「智慧の対立物」あるいは「智慧の反対物」であると十分解釈可能であるが,「得つつある」が余分である。「得つつある」(kappin)を付加することによって,「追い求めること」が未完成・不十分とも考えられ,「追い求めること」という観念を弱めていると考えられる。このケースは,不適である。

(IV) paññā の意味を「追い求めること」とする場合で paññā と kappa からなるコンパウンドに -in を付加したと考える場合、すでに、コンパウンドの前分「追い求めること」だけで「智慧の対立物」あるいは「智慧のバーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 47 —

反対物」を意味することができるのであるから、後分の kappa の意味は、 「追い求めること」という観念を「変質させたり、濁らせたり」する働き のないものに限られてくる。「変質させたり、濁らせたり」するとは、た とえば、「追い求めること」に「妄設」を連結することにより、コンパウ ンド全体の意味が、「追い求めることによる妄設」「追い求めることのため の妄設」「追い求めることという妄設」となり、意味の重心が、「妄設」に 傾くというようなこと、あるいは、「追い求めることのごとき妄設」/「妄 設のごとき追い求めること」のように「追い求めること」の意味が「妄 設」と混ざって濁るようなことである。(「追い求めることと妄設」は、論 外である。) つまり、実質名詞は不可ということである。したがって、前 述の1~8の中では、6. 'proper'、'allowable'、7. 'having the form of'、 'like', 'only a little inferior to', 'almost', 'similar to', 8. (コンパウンドの 最後の場合) 'almost like or equal to' の3類が適合する。この3類は、 相互に意味が似通っていて甲乙をつけがたいのであるが、それらのうち、 "7." と "8." とは、辞書が異なっているだけで、実質は同じものである と考えられ、さらに、kappaは、コンパウンドの最後に位置しているこ とから, "7." と "8." が, 最適と考え, ここでの邦訳は,「~に類した」 とする。paññakappa は「追い求めることに類した(もの)」であり paññakappin は「追い求めることに類したものを持つ(人)」となる。ガー ターの前半の訳は、次のようになる。

彼は願いのない人である。彼は何物も希望していない。彼は智慧のある人であり、また、追い求めることに類したものを持つ人ではない。
(I) ~(IV) の内では、これが要旨に沿った、最も合理的な訳である。
そして、もし、"nirāsayo so na so āsasāno" と "pannāṇavā so na ca pannākappī" が対句となっていないとしても、このガーターの要旨「無一48 — パーリ語経典韻文中の「智慧(pannā)」について(橋本哲夫)

欲」に沿った訳としては、これが、最も合理的な訳であると考える。

3. 注釈の解釈

それでは、この訳は、このガーターに対する注釈者の解釈とどうつながるのだろうか。『パラマッタ・ジョーティカー』は、Sn.1090の pañña-kappī に対して以下のように注記する――

"Tattha uda paññakappī ti udāhu samāpattiñāṇādinā ñāṇena taṇhākappaṃ vā diṭṭhikappaṃ vā kappayati." (Pj.p. 597)

原文の paññakappī と言い換え文の samāpattiñāṇādinā ñāṇena taṇhā-kappaṃ vā diṭṭhikappaṃ vā kappayati とでは、要素の数が異なっている。原文は、"paññā" と "kappa" の二つであるのに対して、言い換え文は "ñāṇa"、"taṇhākappa あるいは diṭṭhikappa" "kappayati" の三つである。どの要素が、注釈者の追加なのかによって訳が異なる。

まず、(I)「taṇhākappa あるいは diṭṭhikappa」を追加だと考えた場合、すなわち、paññā が、同義のまま ñāṇa に書き換えられ、kappa が kappayati に書き換えられているとする場合、samāpattiñāṇādinā を「瞑想の智慧など」と訳し、ñāṇa を「智慧」と訳し、述語に kappayati を持ってくると、「智慧によって作り出す(妄想分別する)」というフレーズができ上がる。そして、taṇhākappaṃ あるいは diṭṭhikappaṃ が、「作り出す(妄想分別する)」の目的語と見るのは、自然である。さて taṇhākappaṃ と diṭṭhikappaṃ はどう訳されるべきか? kappa が何であれ、「妄執」「偏見」の意味は消えることがない。したがって、"samāpattiñāṇādinā ñāṇena taṇhākappaṃ vā diṭṭhikappaṃ vā kappayati."の訳は、「瞑想の智慧などの智慧によって『妄執+ α 』あるいは『偏見+ α 』を

パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 49 —

作り出す(妄想分別する)」となる。しかし、これは、上述したように、「丸い四角」というようなものである。「ñāṇena 智慧によって」と「kappayati 作り出す(妄想分別する)」がコンフリクトするのである。この誤りは、「taṇhākappa あるいは diṭṭhikappa」を追加だと考え、ñāṇaを「paññā 智慧」の同義語と捕らえたことの結果である。Kappayati が、述語である限り、ñāna は「paññā(智慧)」の書き換えとはならない。

(II)「知識(ñāṇa)」を追加と考えた場合―― ñāṇa は「智慧(paññā)」の同義語であるとは限らない。ñāṇa は paññā とは、かなり意味・用法の異なる言葉である。テキスト内には、ñāṇa の「悪い」意味での用例がある。

na brāhmaṇo kappam upeti saṃkhaṃ na diṭṭhisārī na pi ñāṇabandhu, ñatvā ca so sammutiyo puthujjā upekhati , uggahaṇanta-maññe. バラモンは正しく知って,妄設(kappa)に赴かない。偏見(diṭṭhi)に流されず,知識(ñāṇa)にもなずまない。彼は凡夫のたてる諸々の見解(sammuti)を知って,心にとどめない。——他の人々はそれに執着しているのだが。(Sn. 911)

「妄設(kappa)」「偏見(diṭṭhi)」「知識(ñāṇa)」は、精神活動の内容として、また遠ざけるべきものとしては同じ性格である。「知識(ñāṇa)」は、「妄設(kappa)」「偏見(diṭṭhi)」に近い意味を持つのである。ゆえに、この「知識(ñāṇa)」は「不正確な知識」あるいは「誤った知識」であり、今日の「情報」に近いものであると考えられる。「知識(ñāṇa)」をこの意味にとると、Pj. p. 597の "samāpattiñāṇādinā ñāṇena"は「瞑想に関する(不正確な)知識などの(不正確な)知識によって」となり、「kappayati 作り出す(妄想分別する)」と自然につながる。この2要素は、緊密に結びついている、そして、「知識(ñāṇa)」は、一50 — パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫)

追加された要素であった。とすれば、それと緊密に結びついている「kappayati 作り出す(妄想分別する)」も追加されたものと考えられる。 〈この時点で、(III)「kappayati 作り出す(妄想分別する)が追加だと考えた場合」は無意味となった〉。したがって、残された要素、「taṇhā-kappa あるいは diṭṭhikappa」が paññakappa の書き換えとなる。つまり注釈者は、paññakappa を taṇhākappa あるいは diṭṭhikappa に書き換えたのである。この書き換えがなされるということは、注釈者においても、paññā に taṇhā あるいは diṭṭhi のニュアンスがあることを認識していたことの現れであると考える。したがって、paññā は「智慧」ではありえない。「追い求めること」となる。

このように、注釈書においても、paññāは「智慧」ではなく「追い求めること」である。

4. 結 論

Sn. 1090, 1091の 'paññakappī' の'pañña'は、これらのガータを含む 1連のガーター群の要旨からすれば、「智慧」ではなく、「追い求めること」と訳すべきである。

註

- (1) ここでいうパーリ語経典韻文とは、『スッタ・ニパータ』(Sn.と略す)、『ダンマパダ』(Dhp.)、『サンユッタ・ニカーヤ(相応部)』第1巻(SN. vol. 1.)、『テーラガーター』(Thag.)、『テーリー・ガーター』(Thig.)、『イティブッタカ』(Itig.)、『ウダーナ』(Udāna) 内の韻文部分を意味する。この論中では、「テキスト」と呼ぶ。原典は、全て PTS。
- (2) 中村元『ブッダのことば――スッタ・ニパータ』(1984年, 岩波文庫)。
- (3) 荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄『原始仏典』第7巻 仏陀の詩 I 所収「ス

パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 51 —

- ッタニパータ (釈尊のことば)」(講談社, 1986年7月)
- (4) 宮坂宥勝『仏陀の教え――スッタニパータ』(2002年、法蔵館)。
- (5) 渡辺照宏『世界の大思想II-2 仏典 スッタニバータ他』(1969年,河出書房新社)。
- (6) 村上真完・及川真介『仏のことば註(一)~(四)——パラマッタ・ジョーティカー』(1985年~1989年、春秋社)。
- (7) 'He is without aspirations, he is not hoping. He possesses wisdom, he is not (still) acquiring wisdom. In this way, Todeyya, recognise a sage, possessing nothing, not attached to sensual pleasures and existence.' K. R. Norman, *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta) Second edition*. PTS., 2001.
- (8) Kappin (adj.) [fr. kappa] 1. (cp. kappa ii.1a) getting, procuring, acquiring (pañña°) Sn 1090.
- (9) "attaṭṭha-pañňa, mfn. (atta-ṭṭha [often spelt attattha, q.v.]+pañňā), knowing or looking after one's own profit, selfish; Sn.75…" *A Critical Pali Dictionary*, PTSD.。 pañňā のサンスクリット語 prajňā の訳語にも, 'longing for (vāsanā)' が見られる (Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, p. 1063)。 PTSDには, 他に "reason", "knowledge" も見られるが、これらは、広い意味での「智慧」に含まれると考える。
- (10) 料理における「レシピ」に近いものではないかと思う。
- (II) A Critical Pali Dictionary では、この用例として、Sn. 521, 860をあげている。
- (12) Andersen の glossary によれば、コンパウンドの最後にある場合は、 'almost like or equal to' の意味である。また、サンスクリット語 kalpa が bahuvrīhi コンパウンドの後分として使われている場合と同じである。辻直四郎『サンスクリット文法』p. 236参照。
- (13) 1から7までは A Dictionary of Pali より、8は Andersen の glossary より。中村元氏は、「(みだりなる) 計らい」「妄想分別」「劫」「時間」「宇宙時期」「なすべきこと」などと訳す。ノーマン氏は、'figment'、'fit' の訳が多い。
- (14) "Kappin (adj.) [fr. kappa] 1. (cp. kappa ii. 1a) getting, procuring, acquiring (pañña°) Sn 1090;……2. (cp. kappa ii.1b) having a kappa (as duration), lasting a Cycle Pug 13; in Mahā° enduring a Mahākappa DA", PTSD.
- (15) X は nirāsaya に、 X'は āsasāna に あたる。Y は paññāṇavat に、Y'は paññakappin にあたる。
- 52 パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫)

- (16) 『スッタ・ニバータ』に対する注釈書, 『パラマッタ・ジョーティカー』は, Sn. 202の paññāṇa は paññā のことであると注釈する。"paññāṇavā ti paññā vuccati", (Pj. p. 251)。また『テーラ・ガーター』第70偈では, paññā と paññāṇa は同義として扱われている。さらに, bhūripaññāṇa (智慧ある人 Sn. 1136, 1138, 1140) と bhūripaññā (智慧ある人 Sn. 376, Sn. 1097, Sn. 1143, etc.) は, ともに「仏陀」を意味している。
- (17) 計直四郎『サンスクリット文法』p. 223~247参照。
- (18) Dvandva. 並列複合語の場合。
- (19) 狭義の tatpurusa。格は、instrumental.
- (20) 『イティ・ヴッタカ』(Itiv.と略す) p. 35.
- (21) Thag. 785 ts E.
- (22) Sn. 390, 1097.
- (23) 狭義の tatpurusa。格は、dative.
- (24) 『サンスクリット文法』p. 276,「b.用途」参照。
- (25) 『サンスクリット文法』p. 276,「6.述語的用法」参照。
- (26) 『サンスクリット文法』p. 276, 「5.広義の目的」参照。
- (27) Karmadhāraya 同格限定複合語。
- (28) Saṃyuta-Nikāya, p. 53, Thag. 675.など。
- 図) A Dictionary of Pali は、この意味でのコンパウンドの後分の例として kevalakappa, 'allmost all' (p. 728), khaggavisāṇakappa (p. 742), khuddakappa, 'like honey' (p. 770) を挙げる。
- 図) 宮坂氏は、この部分について次のように言う――「ちなみに、Pj. は『そこであるいは、paññakappīとは、あるいは瞑想の智慧など(samāpatti-ñāṇādinā)の智慧(ñāṇa)によって、あるいはtaṇhākappaṃ あるいはdiṭṭhikappaṃ することである』と解する。これによると、智慧によって渴望(taṇhā)を妄想分別したり、誤った見解(diṭṭhi)を妄想分別することであるが、それはありえないことである。……ブッダゴーサは kappin を妄想分別する〔者〕と解しているが、これは kappa に劫(Skt. kalpa)と妄想分別(BSkt. kalpa)の二義があるからであろう。が、その理解は牽強付会の感を否めないと思われる。」(『仏陀の教え』p. 423.)
- ③1) paññakappin は pañña-kappa に -in が付帯していると考え, paññā と kappa を要素とする。
- (32) この場合でのもうひとつの可能な組み合わせ、「paññā=kappayati」、「kappa=ñāna」はありえない組み合わせであるので、扱わない。
- (33) {sng-0911} The brahman, considering, does not submit to figments.

パーリ語経典韻文中の「智慧(paññā)」について(橋本哲夫) — 53 —

He does not follow views, (and) he has no association with knowledge, $\langle 178 \rangle$ and knowing commonplace opinions he is indifferent to them, (saving) "Let others take them up".

(34) 「瞑想」に相当する samāpatti には、第二の意味として、「定犯、入罪」があるが、その意味に解しても「瞑想」のままでも論旨に変化はない。